

しかし、当時の女子進学率はわずか36.7%（昭和25年）であり、看護教育が高卒後3年間の教育、かつ国家試験合格としたことは非現実的といえるほどレベルが高い制度であったと言える。保助看護法は占領という特殊な政治環境があったからこそ成立が可能であった。さらにそこにはGHQ看護課と厚生省看護課の看護の質を向上させるという政策の一致があったのであり、国会で批判をされても決してぶれることのなかった厚生省看護課の政策理念があったことが制度化につながったものと考ええる。

## 注

- 1) 金子光：初期の看護行政 看護の灯たかくかかげて、日本看護協会出版会，1992年
- 2) 全医療新聞，1950年4月15日
- 3) 全医療新聞，1951年2月24日
- 4) GHQ/SCAP RECORDS “Welfare Ministry Suggestions to the Welfare Committee” March 16 1951. 国会図書館
- 5) 第10回国会厚生委員会議事録，1951年3月19日
- 6) 日本医師会編：看護婦確保に関する要望，日本医師会雑誌，24(8)，1950年8月，16.
- 7) 日本医師会編：医師会会報 “看護婦問題について”，日本医師会雑誌，24(7)，1950年7月，651.
- 8) 日本医師会編：日本医師会雑誌，24(9) 1950年9月，836.
- 9) 全医療新聞，1951年4月7日

(平成23年12月例会)

## 『口歯類要』における口歯の意味的考察

西巻 明彦

近代歯科医学は、幕末から明治初めに日本に上陸したと言われている。医学、薬学、獣医学と異なる点は、昭和になるまで官立の歯科医学校が出来なかったこと、官立よりも民間主導のかたちで進んだことである。それに反し江戸時代は幕府、禁裏、藩に口科医（口中医、御歯医師）の制度があったが、明治時代に入ると逆にこれらの官立の制度は大きく後退してしまう。今回、江戸時代の口科とはどのような意味をもっていたのか、その一端を考察した。

口歯科の名称が最初に登場するのが大宝律令耳目口歯科であり、これが平安時代口歯科として独立したと言われている。通説では丹波親康、兼康という口科医の名医がいたと言われているが、必ずしも確実な証拠は現在のところ伝存していない。その中で明代の薛己の著である『口歯類要』が日本においては、承応3年に和刻本として版刻された。版刻されたのは江戸時代を通じてこれ一回限りであるが、江戸時代の口科に大きな影響を与えたと考える。内容は口唇、舌、歯、歯周組織の他に咽喉が主体であるが、附録的には耳、眼、

腋下の休息までの記述がある。この点は、ほぼ上焦の部分に相当しており、今日の口歯の意味とはやや異なっている。また『口歯類要』は内科が中心である。同じ薛己の『外科發揮』には口歯の章がなく、巻六咽喉に口歯の疾患が存在している。日本において内藤希哲は『傷寒雜病類編』の中で、『傷寒論』の「咽喉乾燥するは発汗すべからず。」という解釈について「咽喉乾燥する者、内に津液無きなり。「口舌」と言わざるは、文を省くのみ。」と記している。喜多村直寛は同じ条文解釈において『傷寒論疏義』で、「既に咽喉と言え即ち口舌は其の中なり」と述べている。このことは、口歯、咽喉ともほぼ同義語であることを物語っている。さらに寛政六年に行なわれた医学館の医学考試の中で、口科の「口問主意書」についての問題は、1) 喉痺乳蛾之事、2) 重舌痰包差別之事、3) 走馬牙疳治法之事、4) 齒齲宣露之事、5) 世に云舌疔の事が挙げられている。これらの問題は『口歯類要』の範囲と合致する。

以上のことから口歯の意味は、今日とは異なり、この領域の包括的意味で使用されており、口

科は今日で置き換えるならば口歯咽喉科であり、このような区分は現代の西洋医学ではないものである。基本的に近代歯科医学は江戸時代からの伝

承はほとんどない事も大きな特徴であると考え

(平成23年12月例会)

## 新たに判明した忠犬ハチ公の死因について

中山 裕之

忠犬ハチ公は、渋谷駅前で亡き飼主を10年間待ち続けた逸話で知られる秋田県産の日本犬で、1935年3月8日に満11歳で同駅周辺にて死亡したとされている。遺体は、同日東京帝国大学農学部獣医学科病理細菌学教室(現・東京大学大学院農学生命科学研究科獣医学専攻獣医病理学研究室)に搬入され、病理解剖が実施された。病理解剖の際に採取された主要臓器(肺、心臓、食道、肝臓、脾臓)は、ホルマリン固定標本として当研究室に保管されている。

ハチ公の死因については、病理学研究室に保管されている解剖記録と現存する固定臓器の観察により「慢性犬糸状虫症」と考えられている。しかしながら、これまでハチ公の死因について組織学的検索により詳細に検討されたことがなかった。そこで今回、ホルマリン固定されたハチ公の臓器(肺、心臓、肝臓、脾臓、食道)について、病理組織学的検索を行い、肺と心臓についてはMRI検査も行ったので、結果の概要を報告する。

### 病理組織学的所見

組織観察をおこなった肺腫瘍のすべてに腫瘍性病変が確認された。腫瘍病変は肺の固有構造を置換しながら、巣状ないしびまん性に広がっていた。病変部では中型から小型の紡錘形ないし多角形の腫瘍細胞が、肺胞内や細気管支腔内に充実性に増殖するとともに、大型の気管支枝周囲の結合組織に浸潤増殖していた。一部には軟骨様組織も認められた。腫瘍細胞が大型の血管やリンパ管内に浸潤する像も頻繁に認められた。

心臓でも上記腫瘍細胞のびまん性ないし巣状増殖巣がおもに心内膜下において広範に認められた。静脈と思われる大型血管を同腫瘍細胞塊が塞

栓する像も頻繁に観察された。冠動脈壁は著明な線維性肥厚を示し、陳旧化した梗塞巣と思われる心筋の線維化病変もまれに認められた。

肝臓、脾臓、食道には肺と心臓でみとめられた腫瘍細胞の増殖巣は認められなかった。肺と心臓については免疫染色も行ったが、長期間の固定による抗原失活のためいずれも明瞭な陽性反応を確認することはできなかった。

### MRI 検査

ホルマリン固定された心臓と肺について、固定液に浸漬した状態でT1およびT2強調下のMRI検査を実施した。その結果、T1強調条件下において高信号を示す腫瘤性病変が肺のほぼ全葉に観察され、さらに心臓の右心室壁、中隔壁、左心室壁にも多発性ないしびまん性の病変が観察された。

### 考 察

今回の検索により、ハチ公は、慢性犬糸状虫症に加えて肺と心臓の悪性腫瘍に罹患していたこと、およびこの腫瘍もハチ公の死因として重要であることが新たに明らかにされた。この腫瘍の組織診断は形態学的に悪性度の高い「癌肉腫」と考えられた。今回確認された悪性腫瘍の原発部位を特定することは困難であるが、腫瘍病変は肺と心臓に限られ肺でより広範な腫瘍性病変が形成されていることを考慮すると、肺に原発した腫瘍が心臓に転移病変を形成した可能性が高いと思われる。これらのことから、今回確認された肺と心臓の悪性腫瘍はハチ公の直接的死因として非常に重要であったと考えられる。

(平成23年12月例会)